

○ 募集期間：平成26年4月4日～平成26年5月7日

○ 意見総数：269件

（※一つの意見を複数の項目に分けて記載している場合があるため、以下の意見数とは一致しない）

#### 高大接続・大学入学者選抜を巡る現状と課題（2件）

- 推薦入試やAO入試が問われているにもかかわらず、学校系列間の内部進学に言及がない。
- 「高校生の学習への意欲の低下を懸念する」とする原因は、高校教育が大学進学をめぐる競争教育に極端に傾斜させてきたこと、大学進学に係る条件整備の遅れである。  
大学の学費の引き下げ、無利子奨学金の拡大、給付型奨学金の創設等、大学教育の漸進的無償化への歩みを急ぐべき。
- 高校生、大学生の学習時間の減少や学習意欲の低下は、大学入学者選抜試験の選抜機能の低下が要因としているが、学習時間だけで学習意欲が低下しているとは断言できない。仮にそうだとした場合、教育を点数学力獲得競争に矮小化し、高校教育を大学受験準備教育によってゆがめてきた証左。
- 日本の18歳人口に対する大学の進学率（49.8%）は、オーストラリア（96%）やOECD加盟諸国の平均（62%）と比較してその低く、これは、子供に学ぶ意欲がなく進学をしないのではなく、大学進学時の教育費の負担の大きさに原因がある。親の収入減の中、子供が大学に進学することは年々厳しい状況。また、社会人の大学進学率もOECD加盟諸国の平均（21.1%）と日本（2%）を比しても低くいが、これは休業期間中の生活保障がないことが理由であり、学びたくても学べない、経済的な要因で進学できないという現状が年々深刻になってきている。

## 高大接続・大学入学者選抜の改善についての基本的な考え方（11件）

- 高大接続・大学入学者選抜を巡る現状と課題として、多様化などは責任や対応を問うことは困難だが選抜機能の低下、野放図な大学設置、学習意欲の低下、そのような教育方針を設定した国の責任、大学教育を無視した企業の採用なども当然明示すべき。これら問題とその責任の所在を明示すべきである。
- 幅広い学びの確保のために学校制度をどうするのかなどには言及はなく、学力状況の把握に限定されがちな議論になっている。「幅広い学力や高校時代の主体的な活動の状況、成果等を多面的・総合的に評価する」とあるが、この主旨は推薦入試やAO入試に通じる。高大接続の何を問題にし、具体的にどう解決が見込まれているのか、政策的含意が判然としない。
- 高大接続・大学入学者選抜のあり方について多様化を推し進めていくことが肝要であり、決して一つの方策、唯一の解決策でもって現在の課題を解決することはできない。
- 高等学校・大学の学力低下の問題及び学力向上のための適切な施策認識は、現状認識が十分図られているが、提案されている具体的な施策は対象学生の焦点が絞られておらず、いくつもの矛盾を孕んでいる。この提言の水準はどの学生・学校を念頭においているかを明確化すべき。このような施策が画一的に実施された場合、「中位層」以下の大学ではそれなりに機能するが、「上位層」の大学では一層の水準低下を招く危険も想像され、今後一層の慎重審議が必要。
- 中位層及びそれ以下の学力水準の学生には、基礎学力を有した上で大学進学がなされるような「minimum requirement」基礎学力の担保は重要だが、これからの社会では教科「情報」に関する知識も含める必要がある。
- 現在の日本の教育の問題点は「過度な進学教育中心主義」。「多様な教育」の必要性が叫ばれて久しいが「多様」を「多量」という言葉に置き換えてみればよく理解できる。「多様な」大学入試を目指した改革は、現実的には「国・数・英・理・社」の取捨選択の「多量な」入試であり、その他の教科科目は置き去りにされている。一方、大学入試科目の「軽量化」を重ね合わせると「狭い範囲」を「繰り返し学習」することができる生徒が、大学生となる。確固たる信念をもって大学へ入学した学生以外の多くの学生は4年後の就職を意識した選択をするのではないか。そこにも日本の教育の大きな問題が潜んでいる。
- 課題発見力、解決力といわれるが、課題を見つけるにはバックグラウンドとなる知識、基礎学力・思考の深さが必要。気力、粘り強さ、一生懸命物事に取り組み挑戦する力が必要。
- 日本は、学びたくても学べない、経済的な要因で進学できないという現状が年々深刻になっている。経済的に余裕がないので進学できないのでは、学習意欲が低下するのは当然。大学の学費の引き下げ、給付型奨学金、教材費の支給など、学習意欲のある子どもは誰もが学ぶことのできる教育条件を整えることこそ大事である。

## 大学の人材育成機能の強化（10件）

- GPAを導入すると、学生が不得意な科目を敬遠する。我が国の学生が米国等の学生に比べて勉強しない理由は、勉強してもしなくても卒業できるためであり、修了率の高すぎる大学は、公表するとともに、公的な助成金等を減額するべき。
- 厳格な成績評価の推進については、定員超過に対するペナルティ措置の緩和のみならず、学生が不利益を被らないよう十分に配慮する必要がある。例えば、異なる成績評価基準を同一授業科目の履修者に適用することがないように措置する。
- 今回の2種類の達成度テストによって、高校卒業段階の学力が身に付いていない者は、高校卒業を認めないという線を明確にしない限りは、経営上の判断で学力不足の大学生が多数入学し続けることになり、大学がそうした者の評価を適切に厳しくすれば、卒業できない者が大量に増えることになる。
- 日本の18歳人口に対する大学進学率は49.9%で、オーストラリア96%、OECD加盟国の平均62%と比較してその低さは際立っており、大学の教育費負担の大きさが要因。大学の学費の引き下げ、教材費等の支給などの教育条件整備こそすすめるべき。
- 学生の主体的な学びを重視した大学教育の質的転換を図るため、改革に向けた取組みのための財政支援は、税金の無駄遣い。多くの取組みは、支援の打ち切りで終了している。本来、質的転換は個々の大学の責任においてなされるべきであり、国が財政支援をしてまでも進めるべきことではない。国は大学の取組みとその成果について、情報公表を徹底して促すこと。説明責任を果たさない大学には補助金のカットで迫るべき。大学が担うべき本来の機能を満たしていない大学については、退出させるくらいの覚悟がなくして、改革などできない。
- 募集単位の大きくくり化を提言することは奇異。募集単位を大きくくればアドミッションポリシーは抽象的になり、このために要求する基礎学力の最大公約数的な「基礎の基礎」にならざるを得ない。
- 募集単位の大きくくり化について、高大連携事業を発展・充実させることにより、高校生が適切な専攻分野を判断できる環境を整えることが可能になる。大学としてはモチベーション及び社会への参加意識の高い学生を入学させ、大学教育の活性化に繋がるが、募集単位の大きくくり化がベストの方法とは限らない。分野や実情に応じて、各大学・学部が適切に選択できるようにすることが望ましい。入学後のミスマッチがあった場合も、定員の弾力化が進めば、転学部・転学科、さらには大学間の移動も容易になる。
- 努力している学生に対しては、入学後の進路変更はもっと柔軟に対応すべき。入学試験は東京大学や慶應義塾理工学部の方式が学科ごとの試験より優れていると思う。

○厳格な成績評価より、授業内容の充実の方が先ではないか。「厳格な成績評価」が外部に対してそれなりの意味を持つためには、内容が充実していなければならない。その意味で、一般的に行われている学生による授業評価がどれだけ意味を持っているか疑問。

## 大学入学者選抜の改善（25件）

（多面的・総合的に評価する大学入学者選抜への転換）

○学力以外の客観的評価は極めて困難であり、現在の1点刻みの入試こそもっとも妥当な生徒の「平等な」評価方法であると考え。

（アドミッション・ポリシーの明確化）

○募集単位の大きくくり化とアドミッション・ポリシーの明確化は背反している。

（多様な能力等を評価・判定するための手法の開発・普及）

○高等学校の履修内容の到達度すなわち教科・科目の学力を測るアチーブメントテストに、知識基盤社会で求められる能力・資質を幅広く測定できる多様なアセスメントを加え、それらを総合して大学入学資格を判定する仕組みへと転換していかなければ、課題の根本的な解決には繋がらない。

（推薦・AO入試の改善）

○推薦・AO入試が定員確保のための手段となり、学力不問となっている現状を打破するためには、その実態を明らかにすべきであり、本来のあるべき姿で実施していない大学については、ペナルティを課すことなくして、改善は図れない。

○いわゆるペーパーテストで見ることのできない能力や意欲を見て可否を決定しようとする推薦入試・AO入試のもともとの意味が活かされるような方向を追求すべき。そのためには、大学がこれまで以上に学校内外における様々な経験、特に社会との関わりに重きを置いた入試制度をつくるべき。

（各大学における入学者選抜実施体制の整備等）

○「各大学の入学者選抜を支援する観点から、大学入試センターが各大学に試験問題の素材を提供し、各大学が試験問題の作成に当たって利用できるようにすることも検討すべきである」としているが、アドミッション・ポリシーに基づき、入学者選抜を行うのは、大学個々の責任である。

（その他）

○改革の成果を検証する方法がほとんど検証されていない。例えば、センター試験もPISAと同様に非公表にし、繰り返し出題することで経年調査を行い、改革の成果を客観的な

データとして取得し、検証するための仕組みを試験そのものに組み込む必要があるのではないか。

- 具現化の道筋がまったく示されておらず、「絵に描いたもち」の感が否めない。教育の形はさまざまあって良いと思うが、教科のペーパーテストで選抜することに、大きな問題があるとは思えない。
- 高校が大学の予備校化とならないような大学入試のあり方について検討する必要がある。
- 大学入学者選抜の在り方を見直す場合、大学教育を受ける準備（カレッジ・レディネス）とは何かをより具体的に明確に定義することが必要であり、定義された能力・資質を測定できる実現可能な方策を考えることが必要である。当然ながら、それらの能力・資質は、初等中等教育との連続性を考慮しながら、大学教育との非連続性も加味しながら吟味していく検討が不可欠。さらに、大学教育を受ける準備（カレッジ・レディネス）は、社会に出る準備（キャリア・レディネス）と合わせて検討する必要がある、それを踏まえて新しいアセスメントやテストの実施が検討されるべき。

#### 達成度テスト（発展レベル）（仮称）（70件）

（大学入試センター試験の現状と課題）

- 大学入試センター試験が6教科29科目という多数の出題科目となった原因は、高等学校における履修科目が多様化し、さらに大学が課す入試科目も多様化したから。履修科目も入試科目もその選択の幅を狭める工夫を施せば、50万人の受験生がいたとしても実施運営にあたってさほど大きな負荷は発生しないテストの実現は可能と考える。
- 大学入試センター試験の受験者は50万人を越えるが、果たして、大学入学のためにどれほどの受験生が大学入試センター試験の結果を利用しているのか。良くも悪くも、高等学校の各教室における生徒集団を高校卒業まで維持するために、大学入試センター試験が利用されている。
- 現在の大学入試センター試験は、諸外国の共通試験と比較して、劣るものではなく、高等学校の履修内容に準拠した基礎的・標準的な良質な問題が出題されている。諸外国との比較研究なくして、大学入試センター試験の弊害を議論することは、片手落ちである。
- 大学入試センター試験は、単なる知識を問う設問を並べているのではなく、身に付けた知識の活用（思考力・判断力・表現力）を問う意欲的な設問も数多く出題されている。大学入学のために必要となる教科・科目の学力を正当に評価・測定し、高等学校教育の質を維持することに貢献しているという実態についての評価が低すぎる。テストとしての信頼性、妥当性は高い評価を与えてしかるべきテストである。

- 大学入試センター試験に代表される入学者選抜を「1点刻みによる学力検査への偏重」との懸念が述べられているが、現在の大学入試センター試験の利用は各大学の裁量に委ねられている。第一段階選抜にのみ利用している大学もあれば、すでに資格試験化している大学もあり、現状の仕組みのままでも段階的評価を広げることは容易。そもそも選抜には、定員を上回る志願者があった場合、何がしかの数値化でもって、序列化し、合否判定を行うのは至極当然なこと。さらに、結果をレベル別に段階表示との提言もあるが、上のレベルと下のレベルを区分するのも所詮は1点の違いであって、レベル別に段階表示としたところで、1点刻みからは逃れられない。1点刻みから脱却を図ることをめざすならば、テストの完全資格試験化を模索する以外に方法はないのではないか。
- 今回の制度改革と教育現場が一体となって次世代のリーダーを生み出していくためには、達成度テストと合わせて、教員の能力測定を検討することも重要。達成度テストの結果を効果的に現場にフィードバックし、教員の指導要綱も必要に応じて柔軟に変更するなどの仕組みを検討していただきたい。
- 高等学校の必修科目が大学入試センター試験では必修科目になっておらず、真面目に勉強した受験生が不利になっており、また、科目間の負担が違いすぎる。
- 今回の達成度テスト（発展レベル）については、そもそも議論の前提が「今の入試制度が問題」という形でスタートしているが、現在の入試制度のどこに問題があるのか。「入試が一発勝負」ということで議論が進み、今回はセンター試験に代わるものが、複数回設けられるとのことだが、そもそも入試は一発勝負では無い。特に、私立大学は複数回どころか多すぎるくらいのチャンスがあり、受験も複雑過ぎる。

#### 【達成度テスト（発展レベル）（仮称）の在り方】

（趣旨・目的）

- 「主体的に学び考える力」のように曖昧で複雑な指標を用いた測定とその運用にあたって、民間セクターへ委託すべきではない。
- 「達成度テスト(基礎レベル)」「同(発展レベル)」といった複数の試験の導入は、受験生への負担が増大することも問題で、結果としては中位層の高等学校生徒の学力向上に資するかどうかはそもそも大いに疑問。
- 達成度テスト（発展レベル）は大学教育を受ける上で必要な基礎的な学力を見ようとするものなのか、入試選抜において合否を決定する材料として使おうとするものなのか、その目的が明確でない。

（試験の内容）

- IT化の進行により英語の重要性が高まっており、今や英語を使わないことは考えられない時代。外国語の試験は、英語に限定すべきであり、外部検定試験を導入すべき。
- 専門学科や総合学科に比べ普通科の高校の方が普通科科目に時間が多くさげ、テスト対策

の行えるため圧倒的に有利になると思われる。専門的知識・技術を持った職業人を育むための専門高校やキャリア教育や多彩な学びを保障する総合学科高校の生徒に対する配慮を欠き、専門高校や総合学科高校の生徒の進学を保証するような達成度テストの導入には反対。

- 平易な基礎知識の融合(たとえば数学と物理, 歴史と地理, 日本史と世界史、英語と国語など)は、確かに中位層あるいはそれ以下の水準の大学の入学者選抜では一定の機能が有るのかもしれない。しかし、国立大学等の上位層大学が、その使命を明確にしてアドミッションポリシーを掲げて必様な基礎学力のスクリーニングとして学力検査を行う場合、よほどの作問上の工夫がない限りは、融合と称する中途半端な「発展レベル」問題はその選抜機能に寄与しない。また、我が国の受験産業の現状を踏まえると、考えさせるための融合問題も、2、3年経てば傾向と対策がなされ、単に受験産業にマーケットを提供するだけとなることも予め想定しておかねばならない。
- 一定量の試験問題を用意することは必要だが、達成度テストの目的は生徒の能力を測定すること。新問にこだわるより能力の判別力の高い過去の良問の再利用を進めるべき。
- 主体的に学び考える力を測る試験の方向性に大いに賛成であり、「知識偏重の1点刻みの選抜から脱却」することにもつながるよう、試験は「論述問題」を中心とする方向に変えるべき。なお、試験問題は主体的に学んだ「過程」がわかるものにしていただきたい。
- 達成度テストは外国語の場合、英語に限らず、現時点においてセンター試験で実施されている他言語においても、十分な配慮をしていただきたい。
- 最低限、「教科別」を崩さないでいただきたい。
- 「教科型」の出題がされない場合は、「総合型」、「合教科・科目型」のみ利用した選抜は困難であり、基礎的学力を求めている大学のアドミッション・ポリシーに基づく適切な入学者選抜が実施できない事態が予想される。
- 達成度テストの複数回受験により大学の学事暦等の教育に悪影響が出ないように試験実施体制を整えるべきである。段階別の成績提供については、可能な限り小さな幅での段階別としていただきたい。また、複数回実施の場合には、比較可能なものでないと大学としては、利用できない。
- 情報科は総合的能力指向であり、情報科の試験を用いた学習評価は、多面的・総合的な評価の現実的な手段となり得る。また、「総合的な学習の時間」等における課題探求型学習の成果物を大学入学者選抜で活用することは望ましいが評価が難しいと述べられているが、問題解決型学習も含む情報科の試験により、この問題が解決できると期待される。さらに、総合型問題の開発や汎用的能力の測定などの課題に対しても、情報科の試験問題には既にそのようなものが存在している。このため、達成度テスト(発展レベル)において、「数学・情報」「理科・情報」などの形で情報科の問題を取り込むことが、「経過報告」に挙げられている課題(複数)に対する有効な解決策となる。

(実施方法)

- CBT の導入は、遠い将来には実現可能かもしれないが現実的には導入は困難と考える。現状、高校現場においては、全ての生徒が同時に活用できる PC が用意されてはいない。また、CBT に向く問題のタイプとそうでないタイプの問題があるため、基礎研究なくして、CBT 化を盛り込むことは、安直過ぎる。
- 発展レベルのテスト結果を点数で提示しないのであれば、大学は独自に何らかの入学選抜試験を実施して、評点による合否判定をすることになる。「知識偏重の 1 点刻みの選抜」を大学がしているという決めつけの根拠は不明であり、合否判定は客観的な評点でなければ、受験生には不公平感、不信感を持たれる。国家試験も 1 点差で合否が決まっているではないか。
- あまりに低学年で大学入学資格を手にとると、基礎学力を養成する学校指導に影響が出るのではないかと懸念。その意味で、発展レベルについては、三年生の秋から複数回というのが良いのではないか。
- 達成度テスト（発展レベル）については、複数回実施する場合、実施学年は高校 3 年生とし、実施時期については、現状とほぼ同様の時期（1 2 月以降）にすることが望ましい。高校 1，2 年生，あるいは高校 3 年の早い時期に実施日を設定した場合，一部の学校，生徒においては今以上に受験勉強が早期化し，本来高校で経験すべき多様な活動や経験に支障をきたす。また，高校生の受験勉強の実態としては，センター試験直前までかけてようやく準備が整うことを考慮しても，早期の実施においては，既卒生が断然有利となり，現役生にとっては実態としては現在と変わらない。
- 択一方式による出題のみでは、能力測定に限界（制限）がある。報告書に記載された CBT 方式を検討するのであれば、コンピュータを利用することで実現可能な問題（例えば画像や音声、CG 等を活用したインタラクティブな試験問題）を検討していただきたい。実施用の端末としては PC（デスクトップ・ノート）だけでなく、出荷台数、普及率、価格等の要素を考慮しタブレット端末も対象に含めるべきだと考えます。また、実現に向けたモデル校を指定し、CBT 方式によるパイロットテストの継続的な実施を検討していただきたい。
- 現在議論されている達成度テストの実施を早期化することは中高一貫高で有利になる。
- 大学に入学定員がある以上、合格ラインギリギリにある同じ段階の受験生を全員合格にすることは難しく、その中から、さらに選抜を行う必要が出てくる。段階型の方が、どれくらい高校範囲の学習を習得できているかを示しやすいのかもしれないが、段階と得点の両方を入試に利用できる併用型にすればいいのではないか。
- 科目型でなくなることで、高校の授業よりも受験対策を優先して、高校の授業に目が向かなくなる懸念がある。
- 複数科目合算型や総合問題型の出題もあっていいと思うが、現在のセンター試験を根本的

に変えずとも、教科、科目別の試験構成に、総合問題や複数科目合算型問題も1つの科目とみなして試験に加えるというのがいいのではないか。

(その他)

- センター試験からの移行措置等も検討すべき。
- 大学入試制度を変えることによって一番影響を受けるのは教育現場である。制度変更に当たっては、現場の声を十分に聞き、現場が納得できるような内容にしてほしい。
- 達成度テストの結果を、推薦やAO入試、就職時に活用すると、学校の序列化や学校間競争にさらに拍車がかかり、高校教育をゆがめてしまうため、現行の大学入試センター試験に代えて導入するためには、実施方法や時期、科目、試験問題、大学入試での活用のありかたなど、検討すべき課題が多く、慎重な議論をすべき。

## 高等学校教育の質の確保・向上や大学教育の質的転換を前提とした、高等学校教育と大学教育の連携強化（4件）

- 大学の積極的な情報提供が連携強化には必要であるということは理解できるが、「大学ポータル」は、私立大学側の抵抗があり、目指した姿とは異なるものになっている。欧米と比較しても、大学進学を考える生徒達にとって、大学情報を容易に比較検討できる環境が十分に整っていない。こうした環境整備なくして、ユニバーサル化した大学進学の現状から更に高等教育への進学率を高めることはできないのではないか。
- 所得の格差が教育の格差を生んでいる、格差の再生産が大きな問題でもあるという現状を鑑みれば、所得が低くとも、大学で学ぶ意欲の高い生徒には、より充実した奨学金制度にてサポートすべき。オーストラリアの所得連動型の授業料後払い制度 HELP（Higher Education Loan Program：高等教育ローンプログラム）を参考にしたらどうか。国として留学支援も大事であろうが、優先すべきは高等教育機関への進学率を高め、若者の学び続ける力の養成とその支援にあるのではないだろうか。
- 高等学校教育と大学教育の接続の困難さは、初等・中等教育と高等教育は別個に発達したものであり、高等学校教育が教科・科目での学習を基本としている限り、大学教育の各学問分野での学修との関係が円滑につながらないことはやむを得ないことではないか。
- 接続の多様性については、高等学校への進学率が98.4%（平成25年度）に達している現在、高校生の能力、意欲、関心は多様であり、それを受け入れている高校、そしてそこで行なわれている教育も多様である。同じ科目名であっても、それぞれの高校の状況に応じて、質・量には相違が生じている。
- 高校生の主体的な進路意識形成と進路選択を可能にするために、高校と大学の連携は必要だが、それが大学経営の視点での学生確保の手段、高校の外部への宣伝手段となってしまうのは本末転倒。特定の大学と特定の高校の間の連携ではなく、地域における広範な高校と大学が連携する仕組みを形成する必要がある。
- 高校生が大学で学ぶ内容（面白み、社会への貢献等）が明らかになるような連携強化ができれば良い。目的意識なしに入学した学生が勉学意欲を喪失する事態にならないよう、大学から何らかの情報を提供する必要があるが、患者さんとの接触による戸惑い、生きた動物を使う実習等はあらかじめ理解して入学させるべき。